御幸祭由来

甲斐源氏旧跡

甲斐源氏の基を開いたという源義清は、新羅三郎義光の三男で天永年間（1110－13）に甲斐に入り市河庄、青島庄の下司として、この地に居館を造り、49 才頃甲斐の目代になったといわれ、甲斐に土着した最初の人である。

“薬王寺”後陽成院第八之宮良純親王御座所

薬王寺は天平 18 年（746）聖武天皇の詔勅により、行基が開き観全僧都（カンゼンソウズ）の開山になる名刹である。

当時の客殿の上段の間には、八之宮良純親王御座所（御座の間）の一部が保存されている。親王は、後陽成天皇の第八皇子で 18 歳で得度仏門に入り京都知恩院の門跡となったが、寛永 20 年（1643）12 月事情あって甲斐に流され、興因寺（甲府市）に 12 年間、続いて明歴元年（1655）に当寺に移り 5 年間住んだ後、万治 2 年（1659）6 月許されて京都に帰り、寛文 9 年（1669）66 歳で没した。

御幸祭の儀は、平塩の丘に源義清が住居を定めた後、表門神社の祭神を館に招いたのが初めとされ、平塩の丘に館が無くなって後は、市川一丁目の御崎神社までを渡御することとなった。

また、御輿が川を渡るのは、八之宮良純親王が、橋の上で御輿の渡御をご覧になっていたため、遠慮して川に入ったのが始めとされている。

現在の御輿は明治の始めの物で、川渡りと乱暴な担ぎ方により損傷が激しい。

三珠町ホームページ

後陽成天皇の第八皇子良純親王は、勅勘により寛永 20 年 10 月 11 日、甲州に左遷され、明歴元年（1655）に上野村薬王寺に遷された後、万治 2 年（1659）6 月 20 日勅免によって京都に戻られ、寛文 9 年（1669）8 月に 66 歳で亡くなられた。

毎年 3 月 3 日（旧暦）上野村表門神社より、市川大門町の御崎神社へ御輿が遷らせられるが、その時は、芦川の橋を渡らずに川を渡るのが昔からの例である。その由来は、親王が芦川の橋の上にて御輿をご覧になっていた時、御輿の行列が橋に差し掛かろうとした。親王を拝すると御輿を担いでいた人々は恐縮してためらったが、親王はかまわず通過するように仰せられた。しかし、人々はとうとう川に降り、水中をもかまわず御輿を渡御して、無事御崎神社へ着いた。それが慣例となって今も芦川を渡るのだという。

ある時この慣例を廃したところ、当村に疫病が流行して人々を苦しめたので、誰言うともなく神慮に触れたのだということで、再び川渡りを復活して現在に至っている。

御輿のかけ声

良き輿の（よきこの）　免所（めんしょ）　→　よいとー　めんしょー